

インタビュー

自分たちでつくる学童保育

NPOワーカーズコープ 足立青井地域福祉事業所 嶋田順子さん・古賀直子さんに聞く

足立区の青井兵和通り商店街は、八百屋、魚屋、豆腐屋、総菜屋などが軒を並べる典型的な下町の商店街です。この街に2年と少し前、空き店舗を利用した学童保育「わくわくクラブ」が開所しました。足立区の産業振興課と住区推進課から、商店街活性化と学童保育の両面での支援を受け、労働者協同組合（NPOワーカーズコープ）が立ち上げた事業です。

その学童保育で当初から働いてきた指導員、嶋田順子さん（32）と古賀直子さん（26）に労協での仕事と働き方について伺いました。（編集部）

何も知らずに飛び込んで

——お二人に、「わくわくクラブ」立ち上げの頃のお話を伺います。

嶋田 最初は私一人で、2003年の1月から開室の準備ということで宣伝なども含め、いろいろなものを整えなければなりませんでした。棚も冷蔵庫も何もないので全部一人でやって毎日途方に暮れていましたね。

——お二人は学童保育の指導員の経験は？

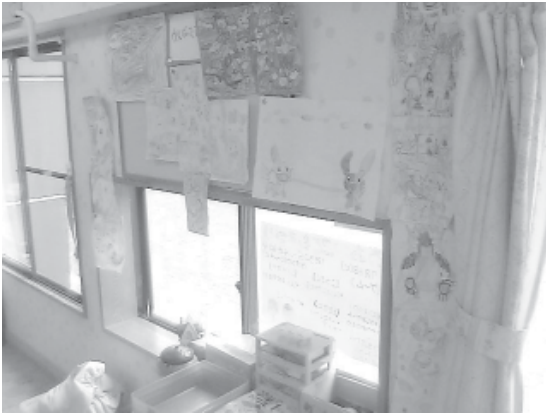
嶋田・古賀 ないです。

古賀 学生を終えてすぐにここに就職したんで。

——たまたま募集があって応募したということですか？

嶋田 私は当時、この商店街の一本うらの通りに住んでいたんです。歩いて5分もしないところで、こんな近いところなら、と。この商店街もだんだん寂れてきたというのを見ていたので、ここに学童保育ができるというのは、どんなことをやるんだろう、自分もやってみたいという気持ちもありました。

古賀 私も家から近いのもありました。そ



れから、学童の先生っていうのは年をとったおばさんたちが子供たちをガミガミ叱っているイメージしかなくて(笑)、その中ではきっといじめられるだろうなと思っていたんですが、新しくできるということならそんなことはないかな、ということで、子供も好きだし応募しようかな、と。

——初めての仕事で、どうやって仕事をつくっていったんですか？

古賀 区の研修に1日くらい行きました。学童の仕事は何をやっていいのかわからなかったのですが、労協の板橋の学童でやっている先輩の組合員が、学童のイロハから毎日指導してくれました。本当に手探り状態でした。

嶋田 私は保育所と児童館の仕事の経験はあったのですが、学童保育の子供たちの生活づくりはまた違っていて。

古賀 学童ってこういうところなんだ、ということがわかるまでが大変でした。それにプラスしてワーカーズコープのこともわか

りませんでした。

——全然やったことのない人に任せるというのも、結構大変なことですね。

古賀 最初に入った3人は、募集に応募した30人の中から選ばれたんですが、多分すごく情熱的なところがあったんじゃないか、と思います。ワーカーズコープの働き方はよくわからなかったけれど、子供に対する熱意はあったから、今ここにいるのかな、と思います。

嶋田 ただ働き口があればいいというのではなくて、ここのこの仕事がやりたいという気持ちに通じたのかも知れませんね。

古賀 もうひとり一緒に入った人も経験はなくて、全体を見るのは嶋田先生の役目、私は一人一人の子供を見る役目で、もう一人の先生ははみ出しちゃったりポツンとしている子を見つけて対応する役目と自然に役割分担ができて。年齢も近かったしいいチームワークでした。

手探りで立ち上げた日々

——3月まで準備期間があって、4月から始まったわけですが、子供はたくさん来たんですか？

古賀 補助金の関係では21人集まらなければ成り立たないということで、必死で集めたのが13人でした。今思えば、経験のない3人にしてみれば13人でちょうどよかった

んですが、経営的には大変だということで、毎週土曜日になるとチラシを撒きに行くんです。子供たちと一緒に（笑）、学校や保育所にも行きましたね。

嶋田 夏休みだけでも利用したいということで入ってきた子達が、夏休みが終わってからも通って来たいということになって、それが学校のクラスで口コミで伝わり、増えてきて1年目は22人でした。

——やはり低学年が多かったんですか？

古賀 初めは人が集まらないので、3、4年生も預かっていました。定員の問題もあって今は1年生が半分以上、あと2年生、3年生という感じですね。もう4年生5年生は入れない。

嶋田 本当だったら私たちがどの子を入れるかは決めていいんですが、区の補助金をもらっている以上、基準も区と同じようにしています。



嶋田順子さん

古賀 料金も区の基準の月6,000円なんですけど、定員を超えた分（定員30人、1割まで増員可）については補助が出ないので12,000円もらっています。

——区内の学童保育は、空きは十分あるんですか？

古賀 近隣の学童でも空きはあるんですが、同じ地域の学童でも全然子供が集まっていないところもあります。

嶋田 自分たちでもすごいなと思うんですが、1年目はチラシ撒きをして、2年目は学校だけにはチラシをお願いしましたが、すぐに定員をオーバーして、3年目の今年はチラシを撒いてこれ以上来たら困るというか、断っている状態なんですよ。

古賀 うちは今、待機児が10名いるんです。前を通るたびに「先生、まだ空きませんか？」と言われて。

——ここに人が集まった理由は？

嶋田 お母さんたちが、学校のクラスの保護者会なんかで口コミで広げてくれたり。

古賀 「ここの学童は狭いし、環境もよくないかもしれないけれど、子供と先生の距離が近い。先生が一人一人の子供を見て大事にしてくれている。それがわかるから、みんなここに入れたがるんじゃないですか。」と保護者の方に言われたことがあります。ガミガミ怒ってるんですけどねえ、っていっ

てるんですけれど(笑)。

「しつこい」と言われるくらい子供たちとも話し合いをするんです。喧嘩ひとつにしても、何でもこういう喧嘩になったのかお互いに聞いて、どうしたら喧嘩にならなかったのかを考えさせて、二人はどうすればいいの?という感じで。時間はかかるんですけど、子供同士で問題を話し合っただけでいいし、ちょっとことでも放ったらかしにしたい。でも自分も保育がわからないから、泣いたりすることもありました。

毎日が闘い

嶋田 1、2年目は、近隣の学童から悪く言えば「あぶれた」子供たちなんですよ。いろいろな意味で問題児が多くて、毎日が子供たちとの闘いでしたね。話を聞く態度にもならない大人をなめている子供だとか、そういう子が多い中、子供とも何でも言い合える信頼関係を築くのが1年目でしたね。

古賀 すごかったですよ。一番初めの4月1日にそれまで他の学童に行っていた3年生の子が来て、公園に遊びに行ってもう1人の男の子を押さえて殴ったんですよ。で、「やられた子の気持ちを考えたことがあるの!」って怒鳴りつけたら、「人なんか関係ねえんだよ!」って。もうブチって切れて。もう親も含めて1年がかりで暴力を止めさせて。それもただ止めるといっても止めるわけないから、何回も話し合いをして。嶋田先生なんかしょっちゅう背中に蹴りを入れられてたよね。

嶋田 毎日が闘いでしたね。

古賀 別の女の子は、逃げちゃって学童にこないんですよ。他の学童でもいつも逃げていて。だから、他の子達は一人で見てもらって、一人はその子を追いかけるんです。最後にはカバンを投げ捨てて、金網を上ったりして(笑)。2時間くらいかけて。

嶋田 学童の中では喧嘩があって、外では逃げてる子がいて、毎日何かがありました。でも、そんな子達も結局最後まで辞めないで来てましたね。

古賀 1年経った頃には大分変わってきて、お母さんも泣きながら「うちの子がこんな風になるとは思わなかった」って喜んでましたね。その子が今度の夏休みに来るんですよ。やっぱり、何にもわからないなりに一生懸命やってたのが伝わったのかな、と。

——そういう子供に対する見方や接し方については、どうやって学んだんですか?

古賀 最初に労協で板橋の学童をやっている方から、子供の安全を守る見方とか、子供の立場に立って物事を考えることとか、教えてもらっていて頭の中ではわかっていたんですけど、やっぱり実際やってみるとうまくできなくて、失敗してしまうこともありました。

嶋田 子供に気持ちが伝わらない、ということでもボロボロ泣いたこともありますね。

古賀 4月当初は私も性格的に内気で、みんなの前で声を出すこともできなかつたんです。そういう意味で、1年後にはすごく成長したなど。それは、子供たちのおかげでもあるし、一緒に働く先生たちのおかげでもあるし、保護者の方のおかげでもある。父母会の前会長さんは、「先生たちとはいいことも悪いことも正直に話せる関係になりたい。それはここの学童がもっとよくなるために自分が協力したいからで、そのためには私は厳しいことを言いますよ」と言ってくれて。

嶋田 ここは自分たちで作り上げたというより、商店街の人に助けられ、子供に助けられ、親にも助けられ、いろんな人に育てられてきたと思います。前の職場の児童館の頃を知っている人がいるんですが、「変わったわね」と言ってくれます。自分らしさが出せているんじゃないかと思います。

古賀 保護者の方に「先生成長したね」と言



古賀直子さん

われます(笑)。

——いろいろ言ってくれる保護者は貴重ですね。

古賀 初めは「あんまり関わりたくない」という感じだった保護者も、だんだん一緒に話したり行事に参加したりするうちに打ち解けて「何でもやります」と言ってくれるようになりました。給料の心配までしてくれるんです。「給料ちゃんともらってるの?私、宝くじが当たったら全額寄付するから!」って(笑)。

嶋田 商店街の行事に毎年参加しているんですが、その時に保護者の協力が必要で、その時に「私は何やるうか?」って言ってくれることが嬉しくて、参加した保護者も楽しんでくれているし。

——保護者には指導員の方から働きかけをしたんですか?

古賀 保護者からすると若い指導員たちを「放っておけない」ということだったんじゃないかと思います(笑)。いろいろミスも多くてその度に頭を下げていたんですが、でも「子供のために何かしたいという思いが伝わってきたから、私たちもやろうと思ったんですよ」と言われました。

嶋田 父母会を立ち上げるために規約をつくるのも、保護者も夜遅くまで何回も集まって、本当にお世話になりっぱなしです。父母会との共催行事も、遠足とお別れ会をでき

ました。行事の打ち上げでは役員とカラオケに行きました。

古賀 そこで「いろいろ抜けていることあるけど、子供に対する熱意や保護者の要望を受け入れようという熱意が私たちを動かしたんですよ。それがなければ私だって無視していた。」と言われました。これからもその姿勢を崩さないでいって欲しいと。

電卓をたたきながら

古賀 とにかく1年目もそうですが、2年目も必死で、保護者はいろいろな要望を突きつけてくるし(笑)「できない」と言ってしまうばそれまでだったんですが、それはしたくないと。例えば、早朝保育は他の学童ではやっていないんですが、そういう要望は何年も前からあったそうです。最初は「ちょっとなあ」と思ったのですが、「頑張ります」ということになりました。結局1人の子を対象に3～4ヶ月間実施したんですが、その子はそれまで学童で荒れていたんです。お母さんが朝早く出かけてしまうという寂しさもあって。その辺が気にもなっていました。でも、早朝にここで預かることになって、だんだん落ち着いてきた。週に何回かは学童に来て、あとは家で我慢する、という約束をして最初の月は週3回、そして2回、1回と段々回数を減らしていきました。でも週1回でも学童に行けば、寂しい思いをしなくて済む、安心できる。

——そういう保護者の要望に応えていくことは、一方では皆さんの仕事が大変になる、

また経営的にも問題が出てくることあるのでは？

古賀 経営に関しては、電卓をたたきながら「これでギリギリでやれる」と。やはり原価率に影響しない数字を出して、それを保護者とも話し合ってお願いで、その時は保護者は皆「いいですよ」と言ってくれたんですが。仕事の量からすると本当に大変なんですよ。

嶋田 あの時も「やる・やらない」で喧嘩みたいになりました。でもやっぱり、その子供の荒れている様子を変えてあげたい、助けてあげたいという気持ちがなければ、できないですよ。

古賀 最終的には「その子のため」ということでは皆意見が一致するんです。「じゃあやるうか」と。

もちろん、学童の時間の中では子供に対して責任があるけれども、学童の時間以外も、どの子のことも心配になります。中には帰りの遅い親もいて、11時12時にならないと帰ってこない。それで子供たちも外をふらふらしちゃうんですよ。私たちがここで残業しているとのぞきに来るんです。「もう、なにやってるの！家に帰りなさい！」って言うんですが、「誰もいない。おなかすいた。」という状況で、初めは「学童の外のことなんだから放っておきなさい」と言われたんですが、放っておけないですよ。それで、お母さんと話してみたら、そういう状況に気付いていなかった。それで「娘と話をしてみます」と言ってくれた。

——家庭の問題まで踏み込まざるを得ない。

嶋田 保護者面談などは、結構相談事なども多いですよ。「うちは今、こういう状況になっていて、どうしたらいいのでしょうかね?」とか(笑)。やっぱり、保護者の人たちが悩んでるんだな、というのもすごく伝わってくる。

地域・家族の変化

——お二人の子供の頃と、地域のようすや子供のようすはどう変わってきていますか?

嶋田 昔はお父さんお母さんがいて、おじいちゃんおばあちゃんがいて、という「家族」という単位が当たり前にあったけれど、今はその単位すらない。

古賀 本当にそうですね。単純に母子家庭が多いですね。結局、母子家庭だとお母さんが一人で子供を育てなければならぬじゃないですか。そうすると負担がかかっているのを感じます。虐待とか、育児放棄をしているお母さんも実際にいるんですよね。

嶋田 両親がいなくて祖父母に育てられている子もいる。本人にしたらすごくつらくて寂しいと思うんです。おばあちゃんも結構高齢になっていて、うちの学童に来ている子を「面倒が見きれない、施設に預けようか、どうしようか」と相談されたことがあって。

古賀 その時も「それだけはやめてください。その分、学童に来てもいいから、もう一度考えてください。」って言ったんですけど。そういう子が増えているんですね。両親とも子育てを放棄しているという。

嶋田 子供たちにどういう負担がかかっているかを目の当たりにしています。

——まさに家族支援的な役割を果たさなければならなくなっているわけですね。

古賀 私が今思っているのは、足立区で労協がやっている「子育てホームサポート事業」と協力して、学童以外の部分で何かできないかなと。やっぱり私たちだけでは限界があるんですよね。夜の時間帯などは見られないですから。

ワーカーズコープの働き方

——夜遅くまで残業をしたりすることもあるそうですが、そういう時間は経営的な面やワーカーズコープの働き方という面からどう考えていますか?

古賀 今もそれが事業所の中で問題になっていて、残業代は会議を含めて10時間までとしているんですね。例えば、今は講座事業もやっているし、保育のこともあって、残業をつけようと思えば、果てしなくつけられる。でも、何故それをつけないのか?と考えた時に、やっぱり雇われているわけじゃないから、どこかからお金が降ってくるわけで



もないし。私自身も矛盾も感じるし疑問も感じるのですが、自分たちでやっているから当然なのかな、という感覚にはなっているんですよ。でも、今入ってきている新しい指導員の子たちは、「何で、学童以外の仕事をしなければいけないの?」とか「何で残業をつけられないの? 仕事じゃん?」という疑問を持っていると思うんですよ。こういう問題は1回か2回話をしただけでは納得できない。私たちも理屈でというより、実際にここで働いてみて、いろいろなことを感じて、納得している部分はあるんですが…。

嶋田 やっぱり労協って、自分の働き甲斐とか働きやすさを求めていい場所とだと思っんですよ。人間関係でもそうだと思うし。それをつくっていくのは自分たちだと思うんですけど、その中で相手と話をしないと何も解決しないし何も生み出されない。それは働いてきた中ですごく実感していて、やっぱりそれがあるから労協だと思うし、自分たちの働きやすい職場もつくれる。自分の意見を出していくことで、自分の働き甲斐にもつながる。

古賀 自分の言いたいことが言えるんだよね。

嶋田 だから、そういうことを含めた働き方だ、という感じ方をしています。

古賀 自分たちでやってきたという感覚があって、区から補助はもらっているけれど、一から自分たちで全部つくってきて、みんな考えてみんなやってきて。だから、残業などの問題も、みんなで話し合って解決していかないのかな、と。

嶋田 「誰かがやらなければならない」と決められた仕事があるわけではなくて、自分たちの問題として、どうしていいかと考えていくところからが仕事だから。

古賀 「ワーカーズコープってこういうところだよ」という話をしても、どうしても雇われているという感覚を持って働いている人はいるんですよ。だから、それをどう変えていくか、というのが私たちの課題ですね。

嶋田 途中で労協に入ってくる人は多いですが、やはり考え方に慣れるまでというか、変わるまでは難しいですよ。

古賀 絶対に納得しきれないと思う。うまく説明しろと言われると全然できなくて、でも私たちが今までやってきたことは伝えていきたいなと思います。立ち上げたときの、こういう保育をしていきたい、こういう学童をつくっていきたいという思いを伝えていきたいというのはずっとあります。

嶋田 成長するっていうのは変化すること。変化をするのはこの時期と決まっているわけじゃない。そういうのをひとりひとりちゃんと見ていきたい。

古賀 他の現場でも、労協に入った頃は「何で残業をつけられないのか」「何で休みが取れないのか」と言ってくる人もいたんですが、その人が責任者になった時に労協の働き方を知ろうとしたんです。そしたら、ガラッと変わったんです。理屈でいくらでも頭の中に入れることはできると思いますが、自分自身が本当に理解しようという気がなければ、多分いつまで経っても理解できない。

嶋田 自分がここで何をやりたいのかですね。

お互いに支え合って

——仕事と共に生活や家族、友人などの関係があって、その中での働き方という問題もあると思うのですが。

嶋田 労協に入って2年目に自分が結婚して、ちょうど1年経ったんですが、やっぱり(独身の時とは)全然違います。でも、自分の睡眠時間を削ったとしても辞めたいとは思わないんですよ。自分だけが頑張っていると思っていないんですよ。自分が大変な分周りが支えてくれていて、お互いのプライベートな部分も理解して支え合いができる。そういう職場づくりをしていけたら、

と思っています。出産に備えて・・・、予定はないんですが(笑)。

古賀 最近、絵の展覧会でフランスに行くので1週間休みが欲しいと言ったら、誰も文句を言わないんですよ。「行きなよ、何とかするから」って言ってくれて。言った人は大したことではないと思っているかもしれないけれど、私はそれがとても嬉しくて。そういう職場関係っていいな、って。

嶋田 常勤と非常勤という働き方があって、非常勤の人はここだけの仕事では生活できない。何かをもうひとつやっていたり、自分のやりたいことがあったり、という中で、今、私のいる東和のわくわくクラブに今年新卒で入った人がいるんですが、学生時代にラクロスで全国3位になって、今も続けたいという夢がある。だから土日もラクロスをやると言っているんですが、行事などがあるときは仕事を優先して欲しいとは言っています。でも私もなるべく土曜日に出るから、ラクロスを続けることは応援したいと思っています。できることはお互いに支えあうということではできているんじゃないかな。

古賀 他のところで仕事をしていた時は、ちょっと休みをもらうだけで「別にいつ辞めてもいいんだよ」と言われたりして(笑)。ここはそういうことはないなど。

——そういう条件をつくっていけるといいですね。

嶋田 そうですね。これからつくりたいですね。何十年を働き続けられるような職場を。子供をおんぶしながらとか（笑）。

古賀 それがやれてしまいそうですよね。ここだったら。それがすごいな、って思う。

——ありがとうございました。

(2005/7/13)



青井兵和通り商店街